キャラクター名
笠原 花梨（かさはら　かりん）

プレイヤー名

シンドローム	ウロボロス ウロボロス	ワークス	セカンダリD	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	20（主観時間だと18歳）	性別	女
覚醒	生誕	衝動	妄想	初期侵食率	37 %
出自	名家の生まれ	経験	大きな転機	邂逅	カウンター

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	2		0			2
感覚	2		0			2
精神	4		0			4
社会	0	1	0			1

HP	28
行動値	8
(非装備時)	8
戦闘移動	13
全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ			交渉	1	
回避			知覚	1		意志	2		調達		
運転：	1		芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ナイフ		-1		2		
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

キャンドル	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
起源種	P	N		
PC1	P　好意	N　嫉妬		
笠原 総	P　誠意	N 疎外感		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2	残り財産P： 0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
コンセ	2	2	メジャー					
効果： C値-lv（下限7）								
シャドースクラッチ	1	2	メジャー	-	-			
効果： 白兵orRC。攻撃力に+lvする。								
原初の赤：エクスプロージョン	1	4	メジャー	視界	範囲(選択)			
効果： RC。攻撃力+8の射撃攻撃。シナリオlv回								
原初の黒：フェイタルヒット	5	6	オート	至近	自身			
効果： ダメージロール時、ダメージ+[lv]D								
尾を食らう蛇	1	4	セットアップ	至近	自身			
効果： HPを1D失う。「オーヴァードに1点でもダメージを与えた時」のエフェクト1つ使用。								
背徳の理	3	3	オート	至近	自身			
効果： オーヴァードに1点でもダメージを与えた時、シーン中ウロボロスのエフェクトの判定ダイス+[lv×2]個								
原初の虚：崩壊のスフィア	5	2D+2	オート	視界	単体		120%	
効果： ダメージロール時、ダメージに+[lv×2]D個								
禁じられし業	1							
効果：								
まだらの紐	1							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

笠原 花梨（かさはら　かりん）。
UGN樺ヶ崎市支部所属のエージェント。
セカンダリとして目覚める前は、別支部に所属のUGNチルドレンだったが、セカンダリとして目覚めた際転属した。

生まれながらのオーヴァード。
名家の生まれだったが、異能の力を持つ娘を疎んだ両親により、UGNの施設に預けられた。
幼い花梨は別れ際父にいわれた「その力を完璧に制御し、笠原家に相応しい子女になれるよう、ここで努力しろ」という言葉を信じ、自分の持つ力を『トクベツな力』だという自負と共に、優秀なUGNチルドレンに育った。
「自分にはトクベツな力がある。名家である笠原家の一員として恥じないよう、立派な人物であらねば」と、彼女は自分を律し、同時にそれを心の支えとし、両親から捨てられた、という事実から目を背け、知らないフリをし、生きてきた。

しかし、ある時、彼女の根幹を、そして世界を揺るがす、大事件が起きる。
レネゲイドの公表。そして、全人類（正確には全レネゲイドウィルス罹患者）のオーヴァード化。
自分がトクベツだと信じる根拠だった力は、瞬く間に、当たり前で普遍的なものへと変わった。
それでも、強力なエフェクトを操る者は一握りだ、自分はまだトクベツだと、言い聞かせていた。
しかし、その頃に、自分は「笠原家に相応しい子女になるため」にUGNへ預けられたのではなく、単に捨てられただけだったという事実を、知ってしまう。
自分が信じていたものが全て崩れ去り、自分が生きていく意味を見失い、彼女はジャームとなった。
「そっか、みんな、私のこと、嫌いだったんだ――
　そうだよね、わたしは、なんにも、トクベツじゃないもの」

ジャームとなっていた間の記憶はない。
目覚めた時は、なんの冗談かと思った。